

## 心霊科学と精神世界－2つの霊性文化－

### 論文要旨

現代日本の霊性思想の中心である精神世界(所謂スピリチュアル)では、講演や展示を主とした「ブース出展型イベント」が大きな位置を占めている。ここでは「魂のレベル上げ」を中心とするニューエイジ的思想を引き継ぎながらも、様々な霊性が混在し、「エネルギー酔い」や「霊障」といった現象も見られる。この霊的輻輳状態はスピリチュアリズムを幹とし、ある程度定まっていた戦前の霊性思想とは対照的である。

本論文は、「宗教、研究、術式、大衆文化」という4つの視座に立ち、戦後の霊性思想が何故輻輳したのか、その変化の一因に4つの相互関係の変化があったと推定し、これを検証したものである。

### 序章

精神世界は、1970年後半に興隆してきたとされ<sup>\*1</sup>、1994年の「フナイ・オープン・ワールド」から始まった講演や展示を中心とした「ブース出展型イベント」を皮切りに、日本の霊性思想<sup>\*2</sup>の中心として急成長した。1995年11月に行われた第2回フナイ・オープン・ワールドでは1万5000人ももの動員数が記録され<sup>\*3</sup>、現在でも「癒しフェア in TOKYO」、「癒しフェア in OSAKA」などが開催され、動員数を見ると「癒しフェア in TOKYO」は2016年に3万2084人、後発の「癒しスタジアム in OSAKA」は2005年のイベント開始時には78人であった動員数が2016年には1164人にまで増加している<sup>\*4</sup>。

これらのイベントにおいて「エネルギー酔い」と呼ばれる現象が報告されている。これはイベントの帰宅後に入眠時幻覚を起こしたり、吐き気をもよおす不快感を伴う現象で、宗教学者の堀江宗正は、イベントに同行した関係者からの「少しでも、靈感があったら、こんな所にいられないのに」という取材内容と共に、この現象を紹介し、これを「スピリチュアルを凝集させ、全面化させた空間にいだく違和感」とであると分析している<sup>\*5</sup>。

この状態を言い表したのが「霊のごった煮」という言葉である。この言葉は、精神世界の興隆期の中心となったニューエイジ思想に対し、社会学者の檜尾直樹がストームの言葉を引用して使い始めたもので、檜尾は「現代スピリチュアルブームは、まさにこのようなニューエイジのがらくたを継承しており(後略)」と述べている<sup>\*6</sup>。本論文の主題は日本の霊性思想がなぜ、このような混沌とした状態になってしまったのか、これを明らかにし、今後の日本の霊性思想のあり方について論考することにある。

なお本論文では、スピリチュアルという言葉がスピリチュアルケアやスピリチュアリズムなど他の用語や意味と混同されることが多いため、原則として「精神世界」という言葉で統一する<sup>\*7</sup>。

## 第一章 精神世界の現状

### 1 アンケート調査及び現地調査から

筆者は2020年3月に、精神世界の技法者157人に対して、アンケートを実施した\*8。「スピリチュアル・心霊主義・心霊研究は同じだと思いますか?」という問いに対して、「違う」または「違うような気がする」と回答した人が79.1%と大多数を占めた。しかし、「違う・違うような気がする」と回答した110人に対して「スピリチュアルと心霊主義の違いを説明できますか」と質問したところ\*9、「正確に説明できる」と回答した人は12.7%、「なんとなくなら説明できる」とした人は26.4%で、精神世界の技法者の約6割強が、両者について正確な理解をしていないことが明らかになった。

ブース出展型イベントの「癒しスタジアム in OSAKA-第61回」(2019年12月15日)の現地調査では、全177ブース中で物販(食品や手芸品等)を除く150ブースのうち、「降霊・交霊・自動筆記・霊媒」などの心霊主義的な技法に属するものと「オーラ診断・過去世診断・波動測定」などニューエイジ的な技法に属するも術式を同時に行っている所が、全体の約1/4にあたる37ブース存在しており、技法者自身が相反する霊性思想を取り込んでおり、「霊的ごった煮」状態は今も続いていることが浮き彫りになった\*10。

## 2 検証及び研究方法

本論文では日本近代文学研究者の一柳廣孝が日本の霊性思想の根を明治時代に求めたことに基づき\*11、「明治維新以降から第2次世界大戦まで」を日本の霊性思想の前期、「戦後から1970年代後半、そして現代に至るまで」を後期として分けることにした。

その上で、「宗教、研究、術式、大衆文化」という4つの視座から前期と後期を比較し、現代の「霊的ごった煮」が作り出された原因について検証する。

## 第二章 日本の霊性思想・文化—前期

前期霊性思想の代表的な事例・人物については、いくつかの学術書、『心霊研究 No870～875』(「田中千代松「心霊研究の発達1～6」)に詳細が記されている\*12。本論文では心霊研究に於いて周知されている内容については詳細を割愛し、極力ポイントになる部分に絞り記していくことにする。

### 1 霊性思想と大衆文化

#### (1) こっくりさん

前期霊性思想と大衆文化の最初の接点は、「こっくりさんブーム」に求められる。「スピリチュアリズム」(1880年頃に上陸したとされている)に起源を持つこっくりさんは、井上円了によれば、西洋のテーブル・ターニング、テーブル・トーキングと同じものであるが、術に使う竹の上に載せる蓋がこっくりこっくりと傾くことから「コックリ」と呼ばれるようになったとされている\*13。

娯楽として広がったこっくりさんは、1907年(明治40)に「言うに云われぬ面白みあるプランセット」というキャッチコピーで玩具としてプランセットが売り出された等\*14、大ブームが去った後も、家庭娯楽として続けられた。

## (2) 催眠術ブームと霊術の興隆

催眠術ブームは一般的に第1次と2次に分けられるが、術式自体は外観や名称を変えて戦後まで存続し<sup>\*15</sup>、1887年（明治20）から大戦が始まる1941年（昭和16）までに「催眠」に関連する書籍は1200冊以上刊行された<sup>\*16</sup>。

催眠術は有識者にも注目され、夏目漱石は大学在学中の1892年（明治25）に催眠術を扱ったジャーナリスト、アーネスト・ハートの論文の翻訳を哲学雑誌に掲載し、連載小説<sup>\*17</sup>の中にも催眠術用語を使用していた。また、他の多くの小説の分野でも題材にされ、大衆娯楽である落語の中にも取り入れられていった<sup>\*18</sup>。

第2次催眠術ブームのきっかけは東京帝大を卒業後、成田中学校の校長をしていた竹内楠三によるものとされる。竹内はわずか1年の間に10冊以上の催眠術関連の著書を刊行している。これらの著書はモール・Aの『Hypnotism』（1889年）を種本として書かれたものであったが、夏目漱石をして「先ず必読の書なり」と言わしめた<sup>\*19</sup>。

このような背景から日本の通信販売業の祖とされる横井無隣が登場する。彼は、次から次へと催眠療法家になるためのHowTo本を販売した。同業者が次々と出現し、全国各地に素人の催眠術師が出現、病苦に悩む民衆が奇跡を求めて催眠治療所に殺到することになった<sup>\*20</sup>。

当時の催眠術は、「霊能的な術式全体」を指しており、催眠状態であれば、「相手を金縛りにする、忍術を使うことができる、幽霊と対話できる、怪力を使うことができる、水で酔うことができる、人体を引き寄せたり飛ばすことができる」など<sup>\*21</sup>、現在でいう催眠術とは別の事象を指すことの方が多かった。この状況に対し、当局は1908年（明治41）警察処罰令を公布し、医師であっても場合によっては処罰対象に入るとし、<sup>\*22</sup>厳しく取締を行った。

しかし、東洋医学・超心理学研究者の井村宏次は「プロの催眠術師たちは催眠術の看板を『霊術』、『精神療法』、『心理療法』と書き換えて、当局の追及をするりと躲して大正期にすべり込んだ」と記しており、皮肉なことに、この処罰令によってそれまで催眠術とされてきた多くが、「霊術」と名前を変え大衆文化の中に霊性思想を構築していくこととなった。

## 2 心霊研究とアカデミズム

1900年代前半（明治30後半～明治40）は、日本で心霊研究が本格化し、関連書籍の流通量が増加した時期であった<sup>\*23</sup>。これにより、心霊研究、心霊主義は霊術の幹となっていったのである。

前期霊性思想を語る上で欠かせないのが、アカデミックな動きがこれに連動していたことである。1903年（明治36）には大沢謙二、福来友吉、呉秀三、など学術研究者による論文集『催眠術及ブググスチオン論集』が刊行されている<sup>\*24</sup>。当時のアカデミズムは心霊研究と歩を並べ、霊術を科学的に解明しようと試みた。この流れの中心となっていくのが、福来友吉である。

千里眼事件（1909年～1911年）は日本の心霊研究とアカデミズムに関する大きな出来事であった。福来と千里眼事件については多くの著書が出版されており、「日本における心霊研究の発達2～3」<sup>\*25</sup>にも詳細に記されているので割愛するが、この実験には多くの学術研

究者が関わっていた。

千里眼事件以降アカデミズムは公には心霊研究から撤退したように見えた。しかし、研究自体は個々の研究者によって民間へとシフトされ、多くの心霊研究者の輩出と、その拠点となる研究所が開設されていくきっかけになった。

### 3 宗教と霊性思想－大本と鎮魂帰神法

宗教学者の吉永進一は、これまでの理論や実践を継承しながら、日本の霊性思想は1908年～1921年(明治41～大正10)に最も開花したとしている。この時期は霊術の最盛期であり、転換期でもあった。

井村は、この時期に霊術的宗教の代表として現れたのが大本の出口王仁三郎だとしている<sup>\*26</sup>。大本と他の宗教との大きな違いは、その術式にあった。鎮魂帰神法はもともと修験や古神道の術式で、それ自体は珍しいものではなく、王仁三郎にこれを伝授した長澤雄楯も稲荷講社の構成員だった<sup>\*27</sup>。旧来であれば神がかりという一言に集約されたこの術式を「よりリファイン」したものが王仁三郎の鎮魂帰神法で<sup>\*28</sup>、大本は、この新しい術式と、立替え立直しの予言によって信者を獲得していった。その中には後に新新宗教<sup>\*29</sup>の教祖となる、生長の家の谷口雅春や世界救世教の岡田茂吉らも含まれていた<sup>\*30</sup>。

### 4 浅野和三郎と心霊研究の拡大

前期霊性思想における「心霊研究」の底上げに大きく貢献した浅野和三郎は、1916年～1921年(大正5～12)まで大本に在籍し、大本の鎮魂帰神法は西洋的心霊研究を取り入れていった。

これにより、鎮魂帰神法は、多くの「大本研究者」と呼ばれる「心霊現象の实在を探求する人々」に関心を抱かせ、彼らは体験を求めてこれを実修しに大本の門を叩いた<sup>\*31</sup>。

大本は2度に渡る大弾圧により、壊滅的な打撃を受けることになるが、結果として大本脱会者によって多くの心霊研究家が育っていくことになった。浅野は1923年(大正12)、日本心霊科学協会の源流となる「心霊科学研究会」を設立し<sup>\*32</sup>、福来とは別のアプローチの仕方で行った。なお、浅野和三郎のライフヒストリー及び心霊研究にもたらした功績、福来との比較等については『神の畏』(松本健一、新潮社、1989年)や「日本における心霊研究の発達4～6」<sup>\*33</sup>に詳細があるので割愛する。

### 5 スピリチュアリズムと神智学

後期霊性思想、精神世界興隆の中心となったニューエイジの源流は神智学にまで遡ることができる。しかし、前期霊性思想の中心は鎮魂帰神法をはじめとした、日本古来のコンテキストに西洋心霊主義が加わった、いわば「和製スピリチュアリズム」だった。

神智学は、スピリチュアリズムに遅れること僅か2年、1889年(明治22)に神智学協会会長のオルコットの来日という形で日本に入っている。1910年(明治43)にブラヴァツキーの『霊智学解説』(博文館)が翻訳され、E・S スティーブソンが海軍機関学校の教員として着任。彼を通じて海軍機関中佐の飯森正芳が、大本に神智学を伝え<sup>\*34</sup>、浅野和三郎も海軍士官学校教員の時にスティーブソンと共同著書を出版している<sup>\*35</sup>。ロッジも開かれ神智学の用語が紹介されるなど、その思想は、大正時代以降ある程度広まっていた<sup>\*36</sup>。一例

をあげると、日本女子大の創設者である成瀬仁蔵は 1906 年(明治 39)の講話で、宇宙の Vibration(波動)に触れる、宇宙の全体意志との合体、さらに 1910 年(明治 43)の講話では、アストラル・ライト、モナドなど、神智学の用語を使用している<sup>\*37</sup>。またオーラに関する情報も神智学を紹介した出版物を通して広がった<sup>\*38</sup>。

にもかかわらず、神智学は支持を得られなかった。この一因は神智学側が「霊現象やスピリチュアリズムは既に解明され、克服されたと達観していた」<sup>\*39</sup>ことにある。神智学は「死者の霊は(中略)例外的な場合以外は、この世に戻ることはできない」、「死者の霊がこの世に降りてくるのではなくて(中略)人間が霊的魂へと上昇する」、「心霊主義者達には哲学はない」など、心霊主義を否定した<sup>\*40</sup>。これはスティーブソンが浅野の大本入信を知り、降霊術の危険性について手紙で訴えていたことから伺い知ることができる<sup>\*41</sup>。

脱呪術を標榜した明治維新政府への反動は、不可視の霊魂と交流できるスピリチュアリズム的な術式へと、人々の関心を向かわせた。この時期において、「可視化できるか否か」、「実験可能かどうか」は重要な要素であり、日本において技法より思想を優先させた神智学的は 1960 年代以降ニューエイジという形で技法が入ってくるまで、大衆から支持されることはなかった。

## 6 前期霊性思想の衰勢—弾圧と取締

霊術は大正中期から昭和初期にかけて、大宣伝が繰り返され、秘伝の書が売りに出され、様々な術式が溢れかえり、霊術家は全国で 3 万人いたとも言われている<sup>\*42</sup>。結果、増加した素人霊術家の施術治療による被害は甚大となり<sup>\*43</sup>、1930 年 11 月(昭和 5)、警視庁は「療術行為に関する取締規則」を発令した<sup>\*44</sup>。

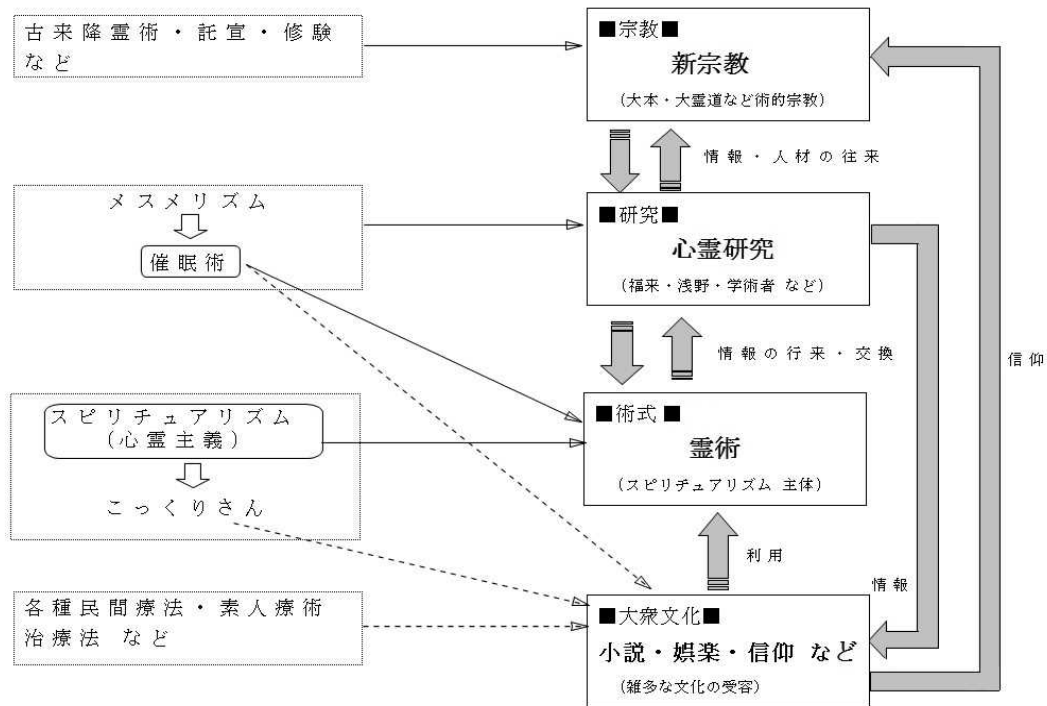
「医政調査資料第 8 輯—療術行為者取締問題参考資料」によれば取締を行う都市は増えていき、また内容もより厳しいものへと改訂されていった<sup>\*45</sup>。資料によれば、この政令の対象には各種民間療法も含めて 9 項目が「霊術」とされており<sup>\*46</sup>、心霊主義も規制を受けることになった。

1941 年の大戦勃発により、霊術、霊的術式を持つ宗教は衰退。また心霊研究も「迷信視され、淫祠邪教に類するもの」と疑われ、当局から拘留される者が出るなど満足な研究ができない状況へと陥っていった<sup>\*47</sup>。

## 7 小括

前期霊性思想を「宗教、研究、術式、大衆文化」の 4 つの視座に立って見ると、それぞれが何らかの形でリンクをしていたことが分かる(図表 1)。

図表 1 前期靈性思想概要\*48



欧米から入ってきたメスメリズムやスピリチュアリズム等の思想は心霊研究によって実証実験され、これを学識者や文化人が受容、さらに大衆にもこっくりさんや娯楽の形で浸透した。

また大本など霊的な術式を持つ宗教もこれらを受け入れながらも、心霊研究の成果を反映し、研究者らが体験を求めて宗教に集まるというように、相互が何らかの形で影響を与えていた。

勿論、戦前の靈術の全てを検証すれば、ブーム末期に氾濫した素人靈術家など、この図表に当てはまらないケースも存在する。しかし前期靈性思想の概要をみれば、心霊研究を1本の幹として、宗教、大衆文化がリンクしていたということができよう。

### 第三章 日本の靈性思想—後期

#### 1 靈性思想の解体と再構築

第2次世界大戦が終わると、前期靈性思想の中心であった靈術は解体・再構築されていく。これは大きく分けると「宗教団体」、「疑似科学」、「心霊研究機関」の3つになる。

宗教への規制が廃され、1951年(昭和26)に宗教法人法が公布されると当局と緊張関係を保っていた宗教団体は、次々と法人格を取得した。しかし、疑似科学の方向に生き残りをかけた人々はGHQから非科学的治病法の烙印を押され、衰退していく運命を甘受せざるを得なくなった\*49。一方心霊研究は、いくつかの心霊研究団体が樹立、より研究色を強めて存続していった。

## 2 研究機関の復興と団体と設立

研究機関は、1946年(昭和21)に福来友吉らを顧問とした「東北心霊研究会」の設立<sup>\*50</sup>、1949年には「日本心霊科学協会」の財団法人認可、また1960年(昭和35)には医学関係者による日本心霊医学界など次々と団体が設立されていった<sup>\*51</sup>。

1963年(昭和38)には防衛大学校教授であった大谷宗司らにより「超心理学研究会」が設立され、千里眼事件以来この分野からは遠ざかっていた学術関係者も隣接分野から徐々に参入するようになり、交霊や念写に加えて、サイコメトリーやテレパシーなども研究対象となっていく<sup>\*52</sup>。新しいものでは、1991年に設立された「人体科学会」は日本学術会議協力学術研究団体で<sup>\*53</sup>、「霊障・霊視・憑依」などについて、人体科学という方向から研究を行っている<sup>\*54</sup>。

## 3 新新宗教の興隆

宗教法人法の下では新新宗教が次々と認可された。元大本の信者であった谷口雅春によって戦前に立教された「生長の家」も1956年に宗教法人格を取得している。当初はニューソートの影響が強かったが、戦後には神智学、薔薇十字主義<sup>\*55</sup>などの思想や技法を翻訳紹介し、一時はUFO関係者と関係を持つなど、欧米と日本の霊的思想を自由に摂取している<sup>\*56</sup>。これは同じく元大本の信者であった岡田茂吉が立教した世界救世教が、基本的には王仁三郎の「御手代」をベースにし続けた<sup>\*57</sup>とのとは対照的である。

そのような中で浅野和三郎と交流が深かった小田切秀人が主宰する「菊花会」を背景とする高橋信次である。高橋が立ち上げた宗教団体GLAはスピリチュアリズムと神智学を結合させることによって作り上げられており<sup>\*58</sup>、宗教家の麻原彰晃、大川隆法ら<sup>\*59</sup>、さらにオカルトビジネスのドンと呼ばれる船井幸雄<sup>\*60</sup>にも影響を与えている。高橋信次は、宗教家としては精神世界の牽引者にまで影響を与えた希有な存在といえることができる<sup>\*61</sup>。

## 4 大衆文化—娯楽とサブカルチャー

霊術の解体により、大衆の超常的なものに対する関心は薄れたかのように思われたが、大衆文化から、これらに消えることはなかった。1940年代後半(昭和21~24頃)の児童雑誌には「秘境もの」、「SFもの」をはじめとして「怪魔もの」と呼ばれる読み物が連載された<sup>\*62</sup>。また映画や小説では高度成長に伴う公害などへの反動として「怪獣」や「心霊現象」などが取り上げられ、1959年(昭和34)にはSF怪獣映画の定番ともいえるゴジラが登場している<sup>\*63</sup>。

また皮肉なことに戦後、霊術を解体したGHQ兵士の読み捨てたおびただしい数のペーパーバックSF本が古本屋に氾濫し「日本の読書界が新たな事態を迎えることとなった」とまで言われるようになったのも戦後すぐのことである<sup>\*64</sup>。SF本は英米の作品を中心として紹介が進み<sup>\*65</sup>、一般にも知られるようになっていった<sup>\*66</sup>。

1960年代にはSF作家の御三家<sup>\*67</sup>とされている筒井康隆、小松左京、星新一らの登場により、日本のSFブームが開花する。その情報発信元の欧米では「ビートニック運動、サイコセラピー、ユング分析心理学、トランスパーソナル、エサレン心理研究所」などニューエイジ思想が台頭してきており、それは欧米の多くの文化の中に溶け込んでいた<sup>\*68</sup>。作家の意図とは別に大衆文化の根底に精神世界的な価値観が流入してきたのである<sup>\*69</sup>。こ

れらは日本で独自に発展し異世界ファンタジーやゲーム、ライトノベルなどの中に取り込まれ、オーラを始めとする多くの精神世界の用語が日本のサブカルチャーの中に氾濫<sup>\*70</sup>、大衆の精神世界受容の土台となったのである<sup>\*71</sup>。

## 5 精神世界の興隆

「精神世界」は1970年後半から使用されはじめた言葉であるが、当時の出版物を見ると「精神世界」という言葉以外にも、「オカルト」、「UFO」、「魔術」、「占星術」といった多岐に渡る言葉が行き交っており、まだ外枠ができていなかった<sup>\*72</sup>。しかし、1994年に「第1回フナイ・オープン・ワールド」が開催されると、これを皮切りに2002年11月には精神世界イベントの代名詞にもなった「スピリチュアル・コンベンション」(スピコン)が開催され、5年後には年間10万人を動員するイベントへと急成長を遂げた<sup>\*73</sup>。ここに、「精神世界」が後期霊性思想の中心として確立したのである。